古文 2

助動詞1

自立語をすべて暗記するのは不可能ですが、付属語の数は限られていますから、付属語を覚えてしまえば、どこが文節の区切りになるかを判断できるようになります。付属語の中でも、助動詞は欠かせないポイント。まずは「る・らる・す・さす・しむ・む・らむ・けむ」から解説します。

助動詞は、古文読解の必須アイテム。特に、それぞれの助動詞の意味と接続パターンは、絶対押さえるべきポイント。正確なデータを瞬時に取り出せるように、徹底的に暗記しなければいけない（どの科目にも言えることであるが、基本事項は、正確に覚えていて、必要な時にすぐ使えてこそ意味がある）。

それでは、助動詞学習の最初の一歩を踏み出そう。

る・らる（受身・尊敬・自発・可能）

意味と接続

	意味	接続
る	①受身 ②尊敬	四段・ナ変・ラ変の未然形
らる	③自発 ④可能	右以外の動詞・助動詞「す」「さす」「しむ」の未然形

cf. 助動詞の接続パターンは、未然形接続が最も多い。

活用

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
る	れ	れ	る	るる	るれ	（れよ）
らる	られ	られ	らる	らるる	らるれ	（られよ）

▼▼ **チェック・ポイント**

□活用は下二段型。

□自発が基本的な意味（自発がもととなって、受身・尊敬・可能の意味に発展した）。

□自発・可能には命令形がない。

□受身の主語は人（受身では無生物が主語になることはまれ）。

□心情語・知覚動詞（例 思ふ・知る・驚く）＋「る」「らる」→**自発**

□「る」「らる」＋打消・反語の語（例 助動詞「ず」「じ」「まじ」・形容詞「なし」）→**可能**

※可能の「る」「らる」は不可能の意味を示す場面で用いられる。

□尊敬語＋「る」「らる」→**尊敬**

□「〜れ給ふ」「〜られ給ふ」（「る」「らる」＋尊敬の補助動詞「給ふ」）→**尊敬以外の意味**

す・さす・しむ（使役・尊敬）

意味と接続

	意味	接続
す	①使役 ②尊敬	四段・ナ変・ラ変動詞の未然形
さす		右以外の動詞の未然形
しむ		活用語の未然形

活用

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
す	せ	せ	す	する	すれ	せよ
さす	させ	させ	さす	さする	さすれ	させよ
しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ

▼チェック・ポイント

□活用は下二段型。

□使役が基本的な意味（使役がもととなって、尊敬の意味に発展した）。

□単独で尊敬の意味になることはなく、尊敬の場合は必ず尊敬語を伴う。

□「す」「さす」は和文に、「しむ」は漢文訓読体に多く見られる。

□**「〜せ給ふ」「〜させ給ふ」「〜しめ給ふ」**は、多くの場合は**二重尊敬**で、「給ふ」より敬意の程度が高い。地の文では帝などに対して用いられ、**最高敬語**とも呼ばれる。

□**「〜せ給ふ」「〜させ給ふ」「〜しめ給ふ」**は、使役の対象が文中に出てくる場合などは、〈使役＋尊敬〉となる。

□使役の「す」「さす」は、軍記物語などでは**受身の代わり**に用いられることがある（例　討たす（＝討たれる）・射させて（＝射られて））。

む・らむ・けむ（推量系の助動詞①）

「む」は**未来**の事実、「らむ」は**現在**の事実、「けむ」は**過去**の事実について推量する。

1. む（ん）

意味と接続

	意味	接続
む（ん）	①推量　②意志　③勧誘　④仮定・婉曲	活用語の未然形

活用

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
む（ん）	○	○	む（ん）	む（ん）	め	○

▼チェック・ポイント

□「む」は、平安末期からは「ん」と表記されるようになった。

□意味の識別→主語の人称で識別できる。

・主語が**一人称**（自分）の時は**意志**（語り手の意志を示す）
・主語が**二人称**（相手）の時は**勧誘**
・主語が**三人称**（他人）の時は**推量**

□「む（ん）」＋体言・「に」「は」「も」「こそ」→**仮定・婉曲**（＝**〜したら・〜のような**）

※体言が省略されていることも多い。

□「む（ん）」と同じ用法で用いられる**「むず（んず）」**は、「むとす（＝「む」＋格助詞「と」＋サ変動詞「す」）から変化したもの。

□「むず（んず）」は活用語の未然形に接続し、〈○・○・**むず（んず）・むずる（んずる）・むずれ（んずれ）・○**〉と活用する。

2. らむ

意味と接続

	意味	接続
らむ（らん）	①現在推量　②原因推量 ③伝聞・婉曲	活用語の終止形 ラ変・ラ変型活用語の連体形

活用

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
らむ（らん）	○	○	らむ（らん）	らむ（らん）	らめ	○

チェック・ポイント

□眼前にない事実＋「らむ（らん）」→**現在推量**（＝今ごろは～だろう↑
眼前に見えない事実そのものを推量する）

□眼前にある事実＋「らむ（らん）」→**原因推量**（＝どうして～だろう↑
眼前に見えている事実の原因を推量する）

□文中では〈事実＋らむ〉の形で表れるので、「らむ」の前にある事実が眼前にあるか、ないかに着目して、現在推量か原因推量かを識別する。

□「活用語の終止形」「ラ変・ラ変型活用語の連体形」という接続パターンは変則的であるが、同じ接続パターンの助動詞は、他に「まじ」「めり」「なり（伝聞・推定）」「らし」「べし」がある。「らむ」を含めて「ま・め・な・ら・べ（豆並べ）」と暗記する。

3. けむ

意味と接続

	意味	接続
けむ（けん）	①過去推量　②過去の原因推量 ③過去の伝聞・婉曲	活用語の連用形

活用

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
けむ（けん）	○	○	けむ（けん）	けむ（けん）	けめ	○

チェック・ポイント

□「けむ」は「らむ」を過去時制に置き換えたものと理解すればよい。

□「けむ」も「らむ」と同様、文中では〈事実＋けむ〉の形で表れるが、過去の事実について述べる用法なので、事実が眼前にあるか、ないかは識別の手がかりとはならない。

⇩次ページには「確認問題」があります。基本事項の確認としてチャレンジしてみましょう。

◀確認問題

次の各文の傍線部の、文中における語法（文法的意味）を記せ。

①ありがたきもの。鼻にほめらるる婿。
②住みなれしふるさと、限りなく思ひ出でらる。
③恐ろしくて寝も寝られず。
④いかに仰せらるるやらむ。
⑤妻の嫗にあづけて養はす。
⑥（帝は）いつしかと心もとながらせ給ひて、
⑦少納言よ。香爐峰の雪はいかならむ。
⑧男はこの女をこそ得めと思ふ。
⑨目の覚めたらむほど念仏し給へ。
⑩思ひつつ寝ればや人の見えつらむ、
⑪親は、我が子は必ず追ひて来たるらむと思ひけり。
⑫（鸚鵡は）人の言ふaらむことをまねぶbらむよ。
⑬いかなる所にか、この木はさぶらひけむ。

●解答・全訳

①**受身**・めったにないもの。鼻にほめられる婿君。
②**自発**・住み慣れてきた故郷が、この上なくなつかしく思い出される。
（←心情語＋「らる」）
③**可能**・おそろしくて寝ることもできない。
（←「らる」＋打消語）
④**尊敬**・どのようにおっしゃられるであろうか。
（←尊敬語＋「らる」）
⑤**使役**・妻であるおばあさんにあずけて育てさせる。
⑥**尊敬**・（帝は）早く早くと待ち遠しがりなさって、
（←「～せ給ふ」）
⑦**推量**・少納言よ。香爐峰の雪はどんな様子だろうか。
⑧**意志**・男はこの女をこそぜひ妻にしようと思う。
⑨**婉曲**・目が覚めているような時に念仏を唱えなさい。
（←「む」＋体言「ほど」）
⑩**原因推量**・（その人のことを）思いながら寝たので（夢の中に）見えたのだろうか、
（←（夢の中で）眼前にある事実＋「らむ」）
⑪**現在推量**・親は、我が子がきっと今ごろは追って来ているだろうと思った。
⑫a **婉曲**　b **伝聞**（鸚鵡は）人が話すような言葉をまねるということだよ。
⑬**過去推量**・どんな場所に、この木はありましたでしょうか。

XLAA2A-Z1A2-01

次の文章は『平中物語』の一節である。主人公の男（平中）はある女と知り合い、一夜をともにした。これに続く以下の文を読み、あとの問に答えよ。

（50点）

そののち、（男は女に）文もおこせず、＊またの夜も来ず。かかれば、＊使人など、わたると聞きて、「＊人にしもありありて。かう音もせず、みづからも来ず、1人をも奉れたまはぬこと」などいふ。心地に思ふことなれば、くやしと思ひながら、とかく思ひ乱るるに、四五日になりぬ。女、ものも食はで、音をのみ泣く。ある人々、「なほ、かくな思ほしそ。人に知ら①れたまはで、異ごとをもしたまへ。2さておはすべき御身かは」などいへば、ものもいはで籠りaぬて、いと長き髪をかき撫でて、＊尼にはさみつ。使ふ人々嘆けど、かひなし。

（男が）来ざりけるやうは、来て、つとめて、人やらむとしけれど、＊官の督、にはかにものへいますとて、bぬていましぬ。さらに帰したまはず、からうして帰る道に、＊亭子の院の召使来て、やがてまゐる。＊大堰におはします御供に仕うまつる。そこにて二三日は酔ひまどひて、もの覚えず。夜ふけて帰りたまふに、行か②むとあれば、＊方ふたがりたれば、みな人々つづきて、たがへにcいぬ。

この女いかに思ふ③らむとて、3夜さり、心もとなければ、文やらむとて書くほどに、人うちたたく。「たれぞ」といへば、「＊尉の君に、もの聞こえむ」といふを、さしのぞきて見れば、この女の4人なり。「文」とてさしいでたるを見るに、切髪を包みたり。あやしくて、文を見れば、

（X）天の川空なるものと聞きしかどわが目のまへの涙なりけり

□になるべしと思ふに、目くれぬ。返し、男、

（Y）世をわぶる涙ながれて早くとも天の川にはさやはなるべき

注　＊またの夜も来ず＝次の夜も来ない。当時の婚姻形態は、男性が女性のもとに通う「通い婚」で、男性は、最初の

XLAA2A-Z1A2-02

三日は続けて通うという習わしだった。　＊使人＝女の召使い。　＊人にしも……＝人もあろうに（あんな男と関係を持つとは）。　＊尼にはさみつ＝「尼」は尼削ぎ（尼の髪型）。「はさみ（はさむ）」ははさみで切ること。　＊官の督＝役所の長官。　＊亭子の院＝宇多上皇。　＊大堰＝大堰川。現在の京都市右京区嵯峨嵐山付近を流れる川で、景勝地として知られ、皇族・貴族らがしばしば宴遊した。　＊方＝方角。行こうとする方角が悪い方角になっていることを「方ふたがり」と言い、それを避けて外出することを「方違へ」と言う。　＊尉の君＝男のこと。

問一　傍線**1**・**4**の「人」は誰を指しているのか、最適なものをそれぞれ次の中から選び、記号を記せ。（6点）

ア男　**イ**女　**ウ**男からの使者　**エ**女からの使者

問二　二重傍線①～③の助動詞の（ⅰ）文法的意味と（ⅱ）活用形をそれぞれ記せ。（12点）

問三　傍線**2**の解釈として最適なものを次の中から選び、記号を記せ。（7点）

ア食事を召し上がらなければなりません　**イ**男から手紙は近いうちに来るでしょう
ウ現世で過ごすことはおできになりません　**エ**このまま終わられるお方ではありません

問四　波線**a**～**c**にあてはまる漢字として最適なものをそれぞれ次の中から選び、記号を記せ。（6点）

ア往　**イ**率　**ウ**行　**エ**鋳　**オ**居

問五　傍線**3**をわかりやすく言葉を補って口語訳せよ。（8点）

問六　□に最適な語を、**X**の歌を参考にして、漢字一字で記せ。（4点）

問七　**Y**の歌には、男のどのような気持ちが込められているか、最適なものを次の中から選び、記号を記せ。（7点）

ア女の行為に対する抗議　**イ**女の決断に対する賞賛

ウ 男自身の不運に対する悲嘆

エ 男自身の怠慢に対する反省

※解答は、濃く、はっきりとご記入ください。

古・助動詞1

XLAA2A-Z1D2

総得点 35/50

1 3/6

問一 1 ウ

4 ア

傍線4の「人」は、手紙を書いている男のもとを訪れた人物であるから、「男」本人や、「男からの使者」とは考えられない。

「この女の人」は、傍線3のように手紙を書いていた男のもとを訪れ、戸を「うちたたい」た上で、男に「もの聞こえむ（＝申し上げたい）」と告げ、「『文』とてさしいで（＝『手紙』と言って差し出し）」た人物。よって、この「人」は、エ「女から（男への）使者」。

2 9/12

問二 ① 4/4 (i) 受身　(ii) 連用形

② 4/4 (i) 意志　(ii) 終止形

③ 1/4 (i) 推量　(ii) 終止形

助動詞「らむ」の文法的意味は、単なる「推量」ではなく「現在推量」であることを覚えよう。㋐

直後に格助詞「と（とて）」があるが、前に「いかに」という疑問を表す副詞があるので、結びの語は連体形となる。

3 7/7

問三 エ

末尾の「か／は」が反語であることに注意して直訳すると、〈そうしたままでいらっしゃるはずの御身だろうか（いや、そのままでいらっしゃるはずの御身ではない）〉となる。これは、男の訪れがなく、ものも食べずに泣いてばかりいる女に対する女房からの慰めの言葉なので、エ「この（＝男から連絡がなくて捨てられた状態の）まま終わられるお方ではありません」という励ましの意と考えるのが最適。

[見本] 本科 標準国公私大コース　国語　添削指導例

4 6/6

問四

a＝オ

b＝イ

c＝ア

5 6/8

問五

△

〈夜になり〉男のことが〈気がかりで〉〈手紙を送ろう〉〈と思って書く〉

「心もとなし」の具体的内容は、傍線3直前の「この女いかに思ふらむ（＝この女は今ごろどう思っているのだろうか）」という箇所で示されている。よって傍線3には女のことを思う男の気持ちが表わされている。②

傍線2は、第二段落にあるような多くの事情で女のもとを訪れられなかった男の行為についての描写。男は何が「心もとなし（＝気がかりだ）」と思っているのか（＝女の様子）を補って訳そう。

6 4/4

問六

○

尼

Xの和歌は、直訳すれば〈天の川は空にあるものと聞いたが、〈実は〉自分の目の前を流れる（私の）涙だった〉という意味。だが、ここでは「天」と「尼」が掛詞になっており、〈自分とは無縁のものだと思っていた尼が、実は現実に自分のすぐ目の前にあった（自分の身に起こった）〉という意味も含んでいる。よって、男は、この和歌を受け取って、女が〈尼〉になるに違いない〉と思ったのである。

7 0/7

問七

✓

エ

↑Yの和歌の「さやはなるべき」は、〈（そんなに早く尼になってよいはずがあるだろうか、いやそんなはずはない）〉という意味であり、「男自身」に対する「悲嘆」や「反省」とは考えられない。

Yの和歌は、直訳すれば〈二人の仲を悲観して（泣く）涙が流れて（その流れが）たとえ早くても、天の川にそんなに（早く）なるであろうか（いや、なりはしない）〉という意味。ここでも、「天」と「尼」が掛詞になっているので、〈二人の仲を悲観したからといって、そんなに早く尼になってよいはずがあるだろうか（そんなはずはない）〉という意味も含む。よって、エ「女の出家に対する抗議」の意を表している。

XLAA2A-Z1C2-01

問題

次の文章は『平中物語』の一節である。主人公の男（平中）はある女と知り合い、一夜をともにした。これに続く以下の文を読み、あとの問に答えよ。

（50点）

そののち、（男は女に）文もおこせず、＊またの夜も来ず。かかれば、＊使人など、わたると聞きて、「＊人にしもありありて。かう音もせず、みづからも来ず、1人をも奉れたまはぬこと」などいふ。心地に思ふことなれば、くやしと思ひながら、とかく思ひ乱るるに、四五日になりぬ。女、ものも食はで、音をのみ泣く。ある人々、「なほ、かくな思ほしそ。人に知ら①れたまはで、異ごとをもしたまへ。2さておはすべき御身かは」などいへば、ものもいはで籠りaゐて、いと長き髪をかき撫でて、＊尼にはさみつ。使ふ人々嘆けど、かひなし。

（男が）来ざりけるやうは、来て、つとめて、人やらむとしけれど、＊官の督、にはかにものへいますとて、bゐていましぬ。さらに帰したまはず、からうして帰る道に、＊亭子の院の召使来て、やがてまゐる。＊大堰におはします御供に仕うまつる。そこにて二三日は酔ひまどひて、もの覚えず。夜ふけて帰りたまふに、行か②むとあれば、＊方ふたがりたれば、みな人々つづきて、たがへにcいぬ。

この女いかに思ふ③らむとて、3夜さり、心もとなければ、文やらむとて書くほどに、人うちたたく。「たれぞ」といへば、「＊尉の君に、もの聞こえむ」といふを、さしのぞきて見れば、この女の4人なり。「文」とてさしいでたるを見るに、切髪を包みたり。あやしくて、文を見れば、

（X）天の川空なるものと聞きしかどわが目のまへの涙なりけり

□になるべしと思ふに、目くれぬ。返し、男、

（Y）世をわぶる涙ながれて早くとも天の川にはさやはなるべき

注　＊またの夜も来ず＝次の夜も来ない。当時の婚姻形態は、男性が女性のもとに通う「通い婚」で、男性は、最初の

XLAA2A-Z1C2-02

三日は続けて通うという習わしだった。　＊使人＝女の召使い。　＊人にしも……＝人もあろうに（あんな男と関係を持つとは）。　＊尼にはさみつ＝「尼」は尼削ぎ（尼の髪型）。「はさみ（はさむ）」ははさみで切ること。　＊官の督＝役所の長官。　＊亭子の院＝宇多上皇。　＊大堰＝大堰川。現在の京都市右京区嵯峨嵐山付近を流れる川で、景勝地として知られ、皇族・貴族らがしばしば宴遊した。　＊方＝方角。行こうとする方角が悪い方角になっていることを「方ふたがり」と言い、それを避けて外出することを「方違へ」と言う。　＊尉の君＝男のこと。

問一　傍線1・4の「人」は誰を指しているのか、最適なものをそれぞれ次の中から選び、記号を記せ。（6点）

ア男　イ女　ウ男からの使者　エ女からの使者

問二　二重傍線①～③の助動詞の（i）文法的意味と（ii）活用形をそれぞれ記せ。（12点）

問三　傍線2の解釈として最適なものを次の中から選び、記号を記せ。（7点）

ア食事を召し上がらなければなりません　イ男から手紙は近いうちに来るでしょう
ウ現世で過ごすことはおできになりません　エこのまま終わられるお方ではありません

問四　波線a～cにあてはまる漢字として最適なものをそれぞれ次の中から選び、記号を記せ。（6点）

ア往　イ率　ウ行　エ鋳　オ居

問五　傍線3をわかりやすく言葉を補って口語訳せよ。（8点）

問六　□に最適な語を、Xの歌を参考にして、漢字一字で記せ。（4点）

問七　Yの歌には、男のどのような気持ちが込められているか、最適なものを次の中から選び、記号を記せ。（7点）

ア女の行為に対する抗議　イ女の決断に対する賞賛

XLAA2A-Z1C2-03

ウ男自身の不運に対する悲嘆　エ男自身の怠慢に対する反省

出典

『平中物語』第三十八段

解説

『平中物語』は、平安時代前期、十世紀中ごろに成立したと見られる歌物語で、作者は未詳。主人公の「平中」とは平貞文（たいらのさだふみ）のことを指し、色好みの伊達（だて）男であったらしい彼の伝説や逸話を集めた恋愛物語で、全三十九段から成る。『伊勢物語』が在原業平（ありわらのなりひら）をモデルとした男の一代記で、当時の理想的な男性像や雅（みやび）の世界を描いたのに対し、『平中物語』は恋愛における平中の失敗談を多く描き、滑稽（こっけい）味や庶民的な雰囲気がある。

問題文は、男（平中）が仕事に追われて後朝（きぬぎぬ）（男女が一夜をともにした次の朝。男性から女性に手紙を送るのが習わしとなっている）の文を送れなかったために、相手の女性が悲観して出家してしまう、という話である。

重要表現　※太字の意味が、文中で使われている意味です。

ℓ1おこす　①**こちらに送ってくる・よこす**　②こちらへ……する・……してくる

対義語　「やる（＝送る・与える）」

ℓ1わたる　①**渡る・移動する**　②年月を送る　③およぶ　④〔敬語を伴って〕いらっしゃる・おいでになる　⑤〔連用形に付いて〕ずっと・一面に……する

ℓ3なほ　①依然　②**それでもやはり**　③さらに・ますます

ℓ5かひなし　①**むだである・ききめがない**　②取るに足らない

参考　「かひ」は、〈効力・効果・価値〉などの意の名詞。

ℓ6つとめて　①早朝　②**翌朝**

ℓ7やがて　①**そのまま・引き続いて**　②すぐに・ただちに　③すなわち・とりもなおさず

要点　〈ある状態に続いて、他のことも生じる〉様子、というのが本来の意味。〈そのうちに〉という現代語同様の用法が現れるのは、江戸時代以降。

問一　1まず、傍線1は女に仕える「使人」のせりふの中にあることを念頭に置いておく。そして傍線1を含む「人／を／も／奉れ／たまは／ぬ／こと」の解釈だが、「人」は名詞、「を」は格助詞、「も」は係助詞。次の「奉れ」は、直後に「たまは（たまふ）」という補助動詞が続いているので、連用形とわかる。連用形が「奉れ」となっているので、この「奉れ（奉る）」はラ行下二段活用の動詞とわかる。「与ふ」の謙譲語として〈差し上げる〉、「（人を）遣る」の謙譲語として〈（使いを）差し上げる・参上させる〉といった意味。次の「たまは」は、ハ行四段活用の補助動詞「たまふ」の未然形。この「たまは（た

XLAA2A-Z1C2-04

まふ」は、尊敬の意を表している。「ぬ」は、未然形に接続していることから、打消の助動詞「ず」の連体形とわかる。最後の「こと」は名詞だが、文末に置かれると〈……ことよ・……ことだなあ〉といった詠嘆の意を表す。以上をまとめると、「人をも奉れたまはぬこと」は、〈人をも差し上げなさらないことよ〉といった意味になる。

ここで、この「使人」のせりふ全体を見ると、「音もせず、みづからも来ず、人をも奉れたまはぬこと」と、〈〜も……ず〉という表現が三回繰り返して用いられていることに気づくはずだ。ここから、この三回の〈〜も……ず〉という表現が、いずれも同じ人物を主語としているだろう、と推測することができる。「音もせず」は〈音沙汰もない（＝便りや訪れもない）〉、「みづからも来ず」は〈自分自身も来ない〉といった意味だから、ここは、「文もおこせず、またの夜も来ず」（ℓ1）という男の行為の無情さ・つれなさを非難しているのである。したがって、傍線1を含む「人をも奉れたまはぬこと」というのは、〈使いの人をも差し上げなさらないことよ〉ととらえればよい。要するに「使人」は、〈（男は）手紙も出さず、本人も来ないのなら、せめて使いをよこせばいいのに（それすらもしないのは、あまりにもひどい）〉と言っているのである。よって傍線1の「人」は、男から（女へ）の使者。正解はウ。

4は、「この女の人なり」とあることから、ア「男」やウ「男からの使者」でないことは明らか。しかし、現代語のように「この女の人」＝〈この女〉と考えてはいけない。ここで（「女の人」ではなく）わざわざ「人」だけに傍線が引かれていることに注意してもらいたい（こういうところから、「出題者は何かを意図しているのではないか」と勘づくことのできる嗅覚（きゅうかく）を身に付けてほしい）。

さて、傍線4の少し前から文脈をたどってみよう。まずは「A人うちたたく。／B『たれぞ』といへば／C『尉の君に、もの聞こえむ』といふを／Dさしのぞきて見れば／（この女の人なり）」のA〜Dについて、それぞれの行為の主体は誰かを特定していく。A「人うちたたく」は、〈「人」が戸をたたいて訪問を告げた〉という意味。現代風に言えば〈「人」がノックした〉ということだ。この「人」が誰かは、この時点ではわからないので、さらに読み進めていく。Bは、そのノックに対して「たれぞ（＝誰なのか）」と問いかけているところ。こう問いかけた人物は、「この女いかに思ふらむ（＝この女は今ごろどう思っているだろうか）」（ℓ10）と思いながら「夜さり……文やらむとて書く（＝夜分……手紙を送ろうと思って書く）」という行動をしていた人物、すなわち男である。Cだが、「注」にあるように、「尉の君」は男を指している。つまりこの人物は、男に「もの／聞こえ／む」という用件があるのである。この「聞こえ（聞こゆ）」は、ヤ行下二段活用の動詞で、「言ふ」「（手紙などを）やる」の謙譲語として〈申し上げる・差し上げる〉といった意味。「む」は意志の助動詞「む」の終止形。よって「もの聞こえむ」は〈申し上げたい〉といった意味になる。これは、男のもとを訪れた用件を告げている言葉なので、Aで戸をノックしたのと同じ人物と考えられる。Dは、「もの聞こえむ」と言われたのでそちらを「さしのぞきて見」た人物だから、男。そして男に見られたのは、「この女の人」であり、「もの聞こえむ」と言った人物である。まとめると、A＝C＝「この女の人」であり、B＝D＝男である。

XLAA2A-Z1C2-05

ここで、傍線**4**よりも後の文脈を見ると、「この女の人」は、「切髪を包」んだ「文（＝手紙）」を男に渡している。ということは、男に手紙を渡すために、男のもとを訪れた人物である。したがって傍線**4**は、女自身ではなく、女から手紙を託された使者である。正解は**エ**。

問二　①を含む「知ら／れ／たまは／で」という箇所で考える。①の前の「知ら」は、ラ行四段活用の動詞「知る」の未然形。また①の後の「たまは」は、ハ行四段活用の補助動詞「たまふ」の未然形。「で」は打消の接続助詞。①「れ」は、直前の語が未然形なので、未然形接続の助動詞。また、直後に補助動詞が続いているので、「れ」は連用形とわかる。以上から、①「れ」は、受身・尊敬・可能・自発の助動詞「る」の連用形とわかる。文法的意味をさらに絞り込むと、ここは〈人に知られなさらないで〉という意味なので、受身ととらえるのがよい。よって、（i）受身、（ii）連用形となる。

②を含む「行か／む／と／あれ／ば」という箇所で考える。②の前の「行か」は、カ行四段活用の動詞「行く」の未然形。②の後の「と」は引用の意を表す格助詞。「あれ」は、ラ行変格活用の動詞「あり」の已然形。「ば」は、接続助詞（已然形に続いているので、順接の確定条件）。②「む」は、直前の語が未然形なので、未然形接続の助動詞。また、直後に引用の格助詞「と」があるので、「む」は終止形。以上から、②「む」は推量・意志・適当・婉曲の助動詞「む」の終止形とわかる。文法的意味を絞り込むために文脈を見ると、ここは、「亭子の院」の「御供」として「大堰」に行った男が、夜になって「（亭子の院が）帰りたまふ」ので、「行かむ」と思った、という流れになっている。つまり〈（男が女のところへ）行こう〉と思った、ということなので、文法的意味は意志。よって、（i）意志、（ii）終止形となる。

③を含む「いかに／思ふ／らむ／とて」という箇所で考える。③の前の「いかに」は、〈どのように〉という疑問の意を表す副詞。「思ふ」は、ハ行四段活用の動詞「思ふ」の終止形または連体形。③の後の「とて」は、引用の意を表す格助詞。③は、直前の語から、終止形接続または連体形接続の助動詞と判断できる。また、直後に引用の格助詞「とて」があるので「らむ」は終止形であるように思えるが、前にある疑問の副詞「いかに」との呼応から、この「らむ」は連体形。以上から、③「らむ」は、現在推量・原因推量・伝聞・婉曲の助動詞「らむ」の連体形とわかる。文法的意味だが、「らむ」が伝聞・婉曲で用いられる場合は、直後に体言が続くことが多い。また現在推量の場合は、眼前にない事実の現在の様子を推量する文脈、原因推量の場合は、眼前にある事実の背後にある原因や理由を推量する文脈で用いられる。ここは、男が〈（この女は）今ごろどう思っているだろう〉と、（眼前にはいない）女の（現在の）気持ちを推量している文脈なので、文法的意味は現在推量。よって、（i）現在推量、（ii）連体形となる。

問三　傍線**2**を単語に分けると、「さて／おはす／べき／御身／か／は」となる。「さて」は、ここでは〈そのような状態で・そのままで〉という意味の副詞。「おはす」は、サ行変格活用の動詞「おはす」の終止形。「おはす」は「あり」の尊敬語で、〈いらっしゃる〉という意味。「べき」は、助動詞「べし」の連体形で、ここでは〈……

XLAA2A-Z1C2-06

はずだ〉という当然の意でとらえればよい。「か／は」は、係助詞「か」＋係助詞「は」で、疑問・反語の意（反語の場合が多い）。疑問の意であれば、それに対応する返答が文中にあるはずだが、ここは対応する返答が見られないので、反語でとらえればよい。以上から、傍線2を直訳すると、〈そのままでいらっしゃるはずの御身だろうか（いや、そのままでいらっしゃるはずの御身ではない）〉となる。

●疑問と反語の識別●

疑問の意か、反語の意かの識別に迷ったときは、仮に疑問の意でとらえてみて、後続の文脈に対応する返答があるかどうかを確認。

返答が**ある**　↓　**疑問**

返答が**ない**　↓　**反語**

※ただし、これは原則であって、例外もあり得るので要注意。

しかし、これだけでは文意がわかりづらいので、文脈を確かめる。傍線2は、女のそばにいる召使いの女房たちが、主人である女にかけた言葉である。食事ものどを通らず声をあげて泣いてばかりいる女に、「かくな思ほしそ（＝このように［くよくよと男のことを］お思いなさいますな）」と言っているのだから、女を慰めていることがわかる。したがって、「御身」とは女（の身の上）のことであり、「さておはす（＝そのままでいらっしゃる）」とは、〈男に見捨てられた悲しい境遇にとどまる〉ことを指していると考えられる。つまり傍線2は、〈あなたは、そのままの不運な悲しい境遇で一生を終わられるような方ではない〉と、女を元気づけようとする言葉なのである。正解は**エ**。

アは、「か／は」の反語の訳出が不十分。**イ**は、直前で「異ごとをもしたまへ（＝ほかのことをなさってください）」と言っている文脈に合わない。**ウ**は、**イ**と同様に直前の言葉に合わないだけでなく、女に対する慰めの言葉にもなっていない。

問四　**a**・**b**は、どちらもワ行上一段活用の動詞「ゐる」の連用形。「ゐる」と読む動詞には、「居る（＝座っている・じっとしている）」と「率る（＝引き連れる）」の二つがある。

aは、「ものもいはで（＝何も言わないで）籠りゐて」とあるので、この「籠りゐて」は、〈じっと引きこもっている〉様子を表している。よって**a**は「居（て）」となる。

bは、「にはかにものへいますとて、ゐていましぬ」とある。「にはかに」は〈急に〉という意味の副詞。「もの／へ／います」の「もの」は、ここでは〈（目的地としての）あるところ〉を意味する名詞。「へ」は格助詞。「います」は、サ行変格活用の動詞「います」の終止形。「います」は「あり」「ゐる」「行く」「来（く）」の尊敬語で、〈いらっしゃる・おいでになる・お出かけになる〉などの意。よって、「ものへいます」は〈あるところへお出かけになる〉といった意味。また、「いまし／ぬ」の「いまし」もサ行変格活用の動詞「います」で、ここは連用形。「ぬ」は完了の助動詞「ぬ」の終止形。よって、「いましぬ」は〈お出かけになった〉といった意味。つまり、〈（官の督［＝役所の長官］が）急にあるところへお出かけになるということで、（男を）連れてお出かけになった〉という文脈だから、**b**は「率（て）」となる。

cは、「たがへ（＝方違（たが）え）／に／いぬ」とある。ここは、〈方違え

XLAA2A-Z1C2-07

（の場所）に行った〉という意味であり、「いぬ」はナ行変格活用の動詞「往ぬ・去ぬ（＝立ち去る・行ってしまう）」の終止形。よってcは「往（ぬ）」または「去（ぬ）」となる。

以上から、正解はaがオ「居」、bがイ「率」、cがア「往」。

問五　傍線3の前半部分を単語に分けると、「夜さり／心もとなけれ／ば」となる。「夜さり」は名詞で、〈夜分・今夜〉といった意味。「心もとなけれ」は、ク活用の形容詞「心もとなし」の已然形。「心もとなし」は、〈①じれったい・待ち遠しい、②不安だ・気がかりだ、③ぼんやりしている〉といった意味。ここは、直前に「この女いかに思ふらむ（＝この女は今ごろどう思っているだろう）」とあることから、②の意味で〈（女の様子が）気がかりだ〉といった意味にとらえればよい。「ば」は、接続助詞（已然形に続いているので、順接の確定条件）。以上から、前半部分は〈夜分、（女の様子が）気がかりなので〉といった意味になる。

後半部分を単語に分けると、「文／やら／む／とて／書く」となる。「文」は名詞で、〈①学問、②漢詩文〉といった意味もあるが、ここは〈③手紙〉の意味でとる。「やら」は、ラ行四段活用の動詞「やる」の未然形。「やる」は、〈（手紙を）送る〉という意味（**「重要表現」**の「おこす」の項を参照）。「む」は、意志の助動詞「む」の終止形。「とて」は格助詞（ここは、動作の目的を示している）。「書く」は、カ行四段活用の動詞「書く」の終止形。以上から、後半部分は〈手紙を送ろうとして書く〉といった意味になる。

設問では「わかりやすく言葉を補って」という要求があるので、主語となる「男は」や、「心もとなければ」の対象となる「女の様子が」といった言葉を補って訳したい。

問六　まず、Xの和歌を解釈する。表現としてはさほど難しくないので、注意すべきポイントだけを指摘しておく。「空／なる／もの」の「なる」は、断定・存在の助動詞「なり」の連体形で、このように名詞（または活用語の連体形）に付いた場合、〈……にある・……にいる〉といった存在の意味を表す。「聞き／しか／ど」の「しか」は、過去の助動詞「き」の已然形である。これらを踏まえてXの和歌を直訳すると、〈天の川は空にあるものと聞いたが、自分の目の前を流れる涙だった〉となる。遠くにあるはずの「天の川」が、現実に自分のすぐ目の前にあった、というのである。

だが、和歌を解釈する際には、言葉の表面的な意味をとらえるだけでは不十分である。

●和歌の解釈の注意点●

和歌は、前後の文脈や詞書（ことばがき）などから、**その和歌は〈誰が、どのような状況で〉詠んだものなのか**をとらえた上で、解釈すること。

そこで文脈を確認する。歌の詠み手である女は、「尼にはさみつ」（ℓ5）とあるように、髪を切り落として出家した（＝尼となった）のである。したがって、この和歌の「天（あま）」は、「尼（あま）」との掛詞（かけことば）になっていることがわかる。すなわち、〈遠くにあって自分とは無縁の存在だと思っていた「尼」が、実は現実に自分のすぐ目の前にあった（自分の身に起こってしまった）〉、という意味も、Xの和歌には含まれて

XLAA2A-Z1C2-08

いるのである。

そこで空欄部分だが、「□になるべしと思ふに、目くれぬ」とは、〈□になるに違いないと思うと、目の前が真っ暗になってしまった〉という意味であり、これはXの和歌を受け取った男の反応である。男は、女がXの和歌に込めていた、〈無縁だと思っていた尼になってしまった〉というメッセージを正しく理解し、衝撃を受けているわけである。したがって正解は「尼」。

問七　**問六**で見たように、男は、Xの和歌によって〈女は尼になったにちがいない〉と思い、衝撃を受けた。それに対する男からの返答が、Yの和歌である。

こちらも、注意すべきポイントだけを指摘しておく。「世／を／わぶる」の「世」は、〈俗世間〉などの意味もあるが、ここはとくに〈男女の仲〉の意でとらえるべき。「わぶる」は、バ行上二段活用の動詞「侘ぶ」の連体形。「わぶ」は、〈思い嘆く・悲観する〉といった意味。「早く／とも」の「とも」は接続助詞で、〈（たとえ）……（であっ）ても〉といった意味。「さ／や／は／なる／べき」の「さ」は、〈そのように〉といった意味の代名詞。「や／は」は、係助詞「や」＋係助詞「は」で、反語の意を表す。「なる」は、ラ行四段活用の動詞「なる」の終止形。「べき」は、助動詞「べし」の連体形（係助詞「や」があるので、係り結びの法則による）。「べし」のここでの文法的意味は可能。これらを踏まえてYの和歌を直訳すると、〈男女の仲を悲観して（泣く）涙が流れて（その流れが）たとえ早くても、天の川にそんなになることができるか（いや、できはしない）〉となる。二人の仲を悲しんで流す涙の流れが早いからといって、そんなに早く天の川になることはできないだろう、というのである。

だが、やはりここで、言葉の表面的な意味をとらえるだけにとどまらず、文脈を踏まえた解釈をしていく必要がある。先に見たように、Yの和歌は、女が男に送ったXの和歌に対する返歌である。ということは、Yの和歌の「天」にも、「尼」の意が掛けられていると見るべきである。するとYの和歌には、〈あなたと私の仲を悲観したからといって、そんなに早く尼になってよいはずがあるだろうか（いや、そんなに早く尼になってよいはずがない）〉といった意味も含まれているのである（この場合、「べき」の文法的意味は適当で解釈すればよい）。男は、女がすぐさま出家して尼になってしまったと思い、女の行為に抗議しているのである。よって正解は**ア**。

イは「（女に対する）賞賛」が、「さやはなるべき（＝そのようになることができるだろうか、いや、なれはしない）」という反語の意に合わない。**ウ・エ**は、男の気持ちが「男自身」に向けられていると解釈しており、「尼」すなわち女に向けられていることをとらえられていない。

全訳

その後、（男は女に、後朝（きぬぎぬ）の）文もよこさず、次の夜も（女のもとへは）来ない。このようだったので、（女の）召使いなどが、（男が女のもとに）行くと聞いて、「（自分の主人は）人もあろうに（あんな男と関係を持つとは）。このように便りもせず、自分自身（＝男）も来ない、（女のもとへ）使者も差し上げなさらないことよ」などと言う。

XLAA2A-Z1C2-09

（女は、召使いの言うことが自分の）心にも思うこと（と同じ）なので、残念に思いながらも、あれこれ思い乱れるうちに、四、五日が経った。女は、何も食べないで、声をあげて泣くばかりである。（その場に）いる女房たちが、「やはり、このように（くよくよと男のことを）お思いなさいますな。他人に知られなさらずに（＝他人に知られなさらないようにして）、ほかのことをなさってください（＝ほかの男性との縁をお考えなさいませ）。（あなたは）そのままでいらっしゃるはずの御身でしょうか（いや、そのままでいらっしゃるはずの御身ではありません）」などと言うと、（女は）何も言わないで引きこもって、たいそう長い髪をかき撫でて、尼削ぎにはさみで切ってしまった。（女が）召し使う女房たちは嘆くけれども、仕方がない。

（男が）来なかった理由は、（はじめの夜に）来て、翌朝、（女に後朝の文を送る）使いを出そうとしたが、（男の勤め先の）役所の長官が、急にあるところへお出かけになるということで、（男を）連れてお出かけになった。（長官は男を）まったくお帰しなさらず、やっとのことで帰る途中で、亭子の院の召使いが来たので、（男は）そのまま（亭子の院のところに）参上した。（そして男は、亭子の院が）大堰にいらっしゃるお供としてお仕えする。（男は）そこで二、三日はひどく酔っ払って、意識がはっきりしない。夜が更けて（亭子の院が）お帰りになるので、（男が女のもとに）行こうとすると、（亭子の院が帰るべき御所は、大堰からは）方ふたがりなので、お供の人びとはみな引き続き、方違えの場所に行く。

あの女は今ごろどう思っているだろうかと（男は）思って、夜分、（女の様子が）気がかりなので、手紙を送ろうとして書いている時に、誰かが（戸を）たたく。「誰なのか」と言うと、「尉の君（＝男）に、申し上げたい」と言うので、のぞいて見ると、あの女の使者である。「お手紙です」と言って差し出したのを見ると、切り取った髪が包んである。（男は）不思議に思って、手紙を見ると、

天の川……〈天の川は（遠い）空にあるものと聞きましたが、（それは現実に）私の目の前を（川のように）流れる涙でした。（それと同じように）尼は自分に無縁のものと思っていましたが、現実に私の身の上に起こったことでした〉

（男は、女が）尼になるに違いないと思うと、目（の前）が真っ暗になった。返歌として、男（は次のように詠んだ）、

世をわぶる……〈（あなたと私の）二人の仲を悲観して（泣く）涙が流れて（その流れがどんなに）早くても、（その涙が）そんなに（早く）天の川になることができるでしょうか（いや、すぐに天の川になったりはしないでしょう）。（それと同じように、あなたは）そんなに（早く）尼になってよいでしょうか（いや、なってよいはずがありません）〉

XLAA2A-Z1C2-10

解答

問一　1ウ　4エ

問二　①（i）受身　（ii）連用形

②（i）意志　（ii）終止形

③（i）現在推量　（ii）連体形

問三　エ

問四　aオ　bイ　cア

問五　男は、夜分、女の様子が気がかりなので、手紙を送ろうとして書く

問六　尼

問七　ア